

ボランティア体験が学生にもたらす教育効果 (I)

三瓶まり・北川かほる・福井典子*・南前恵子・
前田隆子・笠置綱清

Mari SAMPEI, Kahoru KITAGAWA, Michiko FUKUI,
Keiko MINAMIMAE, Takako MAEDA and Tsunakiyo KASAGI

Educational effectiveness of students working as volunteers with children (I)

現在の日本社会は少子高齢化社会であり、大きな社会問題になっている。周囲に子どもは減少し、幼い子どもと接する機会は非常に限られてきている。その結果、自分が子どもを出産したときに初めて子どもを抱く経験をしたり、育児がうまくいかずに不安を抱く女性が増加している。

現代の学生においても、講義を受けるだけでは子どもの生活を理解することは難しく、病院実習においても、子どもとうまく関わるができない学生もいる。その原因の一つとして、子どもとの体験の少なさを指摘するものもある¹⁾。

そこで今回は、学生が子どもをどのようにとらえているのか、また子どもを理解するうえで子どもとの体験はどのように影響するのかについて調査、検討した。

ここでいう子ども理解とは、子どもは成長発達の途上にある存在であることを理解すること、つまり、生活技術や人間関係など日常の様々なできごとを学習する段階にあることを理解することを意味する。

対象と方法

1、糖尿病の小児を対象に生活指導を行う目的で大山サマーキャンプが例年開催されるが、その会の運営にボランティア(名称・大山家族、以下大山家族という)で参加する学生25名を対象に、①これまでの子どもと接した経験の頻度②花沢の対児感情評定尺度²⁾を用いて病児に対する意識について調査し、T検定および χ^2 検定を行って分析した(表1、表2)。

2、大山家族終了後2カ月の時点で、参加学生で鳥取大学医療技術短期大学部に在籍する18名に対して、

看護学科 *鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設

表1 花沢の胎児感情評定尺度

1. 接近項目				
元気な	いとしい	おもしろい	かわいい	素直な
明るい	いじらしい	あどけない	楽しい	あたらしい
活発な	ういういしい	すばらしい	純粋な	あいらしい
あまい	あたたかい	ほほえましい		
1. 回避項目				
つらい	わがままな	じれったい	うっとしい	
うるさい	だらしない	やかましい	あつかましい	
しつこい	にくらしい	むずかしい	わずらわしい	
うそつきな	ずうずうしい	めんどくさい		
きたない	ねたましい	つまらない		

記入例) 病児を思い浮かべてどのような感じがありますか。下の言葉をみたときにあなたの気持ちに合うところに○をつけてください。

非常にその通り その通り 少しその通り そんなことはない
辛い |-----|-----|-----|

非常にその通り 3点
その通り 2点
少しその通り 1点
そんなことはない 0点

回答を上記のように得点化して検討した

表2 参加学生の背景

		性別		
		男	女	合計(人)
		6	19	25
ボランティア参加回数				
1回	2回	3回	4回	無回答(人)
14	4	3	3	1

表3 子どもと接した経験と接する態度

	子どもと接した経験 (初回参加者数)			
	ある	少しある	ほとんどない	ない(各)
子どもと接した経験の有無	21(11)	1(1)	3(2)	0(0)
病児と接した経験の有無	14(4)	1(1)	7(7)	3(2)

	子どもと接する態度 (初回参加者数)			
	うまくできる	できる	できない	非常にできない(各)
子どもとうまく接することができる	5(3)	17(9)	2(2)	1(0)

大山家族での活動内容、子どもとの関係、子どもの理解の程度について面接法によって聞き取り調査を行い、その内容を分析した。学生18名の内訳は、1年生11名、2年生3名、3年生4名であった。また、ボランティア初参加が11名、2回目参加が4名、3回目参加が3名であった。

結 果

1. 経験の有無と接する態度 (表3、表4、表5)

「これまでの子どもと接した経験の有無」について、「ある」と答えたものは21名、「少しある」は1名であり、両者を合わせると88%を占めた。一方、「これまでの病気をもった子どもと接した経験の有無」に対して、「ある」と答えたものは14名、「少しある」は1名であり、両者を合わせると全体の60%を占めた。14名うち11名は大山家族の参加経験者であった。

表4 子どもに関わった過去の経験内容

	参加学生	参加回数	兄弟・姉妹	過去の子どもとの関わり
1	1年女子	1	弟	4歳年下の弟、あまりない
2	1年女子	1	弟	3歳年下の弟、親戚の子
3	1年女子	1	兄	中学生時代から近所の小学生とよく遊んだ
4	1年女子	1	兄	近所やいとこに小さい子が多く、よく一緒に遊んだ
5	1年女子	1	兄、妹	5歳年下の妹、高校時代に幼児と遊んだ
6	1年女子	1	兄、弟	小学時代近所の子とも遊んだ
7	1年女子	1	兄、妹	小学時代近所の子とも遊んだ
8	1年女子	1		あまりない
9	1年女子	1		あまりない
10	1年女子	1	妹	6歳年下の妹、親戚の子ども
11	1年女子	1	妹	妹とよく遊ぶ、親戚の子の面倒をみる
12	2年女子	2	4人兄弟	
13	3年女子	2	姉、妹	7歳年下の妹、妹の友達と遊んだ
14	2年女子	2	兄、弟	あまりない
15	2年女子	2	弟	12歳年下の弟や子供会などで小さい子の面倒をみる
16	3年女子	3	弟	7歳年下の弟の面倒をみている
17	3年女子	3	妹	10歳年下のいとこと遊んだ
18	3年女子	3	妹	妹やいとこと遊んだ

表5 子どもと接した経験と接する態度

1. 子どもと接した経験と接する態度

	うまく接することができる	接することができない(各)
経験 あり	21	1
経験 なし	1	2

$\chi^2=4.827$ $p=0.02$

2. 病児と接した経験と接する態度

	うまく接することができる	接することができない(各)
経験 あり	15	0
経験 なし	7	3

$\chi^2=2.75$ $p=0.05$

次に、「子どもと接する態度」について、「うまく接することができる」と答えたものが5名、「できる」と答えたものが17名であり、全体の88%を占めた。この22名中14名は初参加者であった。しかし、子どもと接した経験の内容をみると、ほとんどが幼い時の兄弟

や親戚の子どもと遊んだ経験であった。

子どもと接した経験の有無と接する態度との関係では、「うまく接することができる」と答えた22名中21名が「経験あり」とするもので、「うまく接することができない」と答えた3名のうち2名は「経験なし」であった。子どもと接した経験の有無と接する態度とのp値は0.02で、有意な関連がみられた。

一方、病児との体験の有無と子どもと接する態度との関係では、「うまく接することができる」と答えたものは22名で、「接した経験がある」と答えた15名はすべてうまく接できると答えていた。また、「うまく接することができない」と答えた3名はすべて経験なしであった。病児との体験の有無と接する態度とのp値は0.05であり、有意な関連がみられた。

2. 病児に対する対児感情 (図1、図2)

1) 接近得点の点数分布

接近項目の回答を得点化して接近得点をみると、合計の平均値は54点中29.2点であり、項目別では「子どもはかわいい」や「子どもは純粋」で2点以上の高値を示していた。

2) 回避得点の点数分布

回避項目の回答を得点化して回避得点をみると、合計の平均値は54点中11.0点であり、項目別では「こど

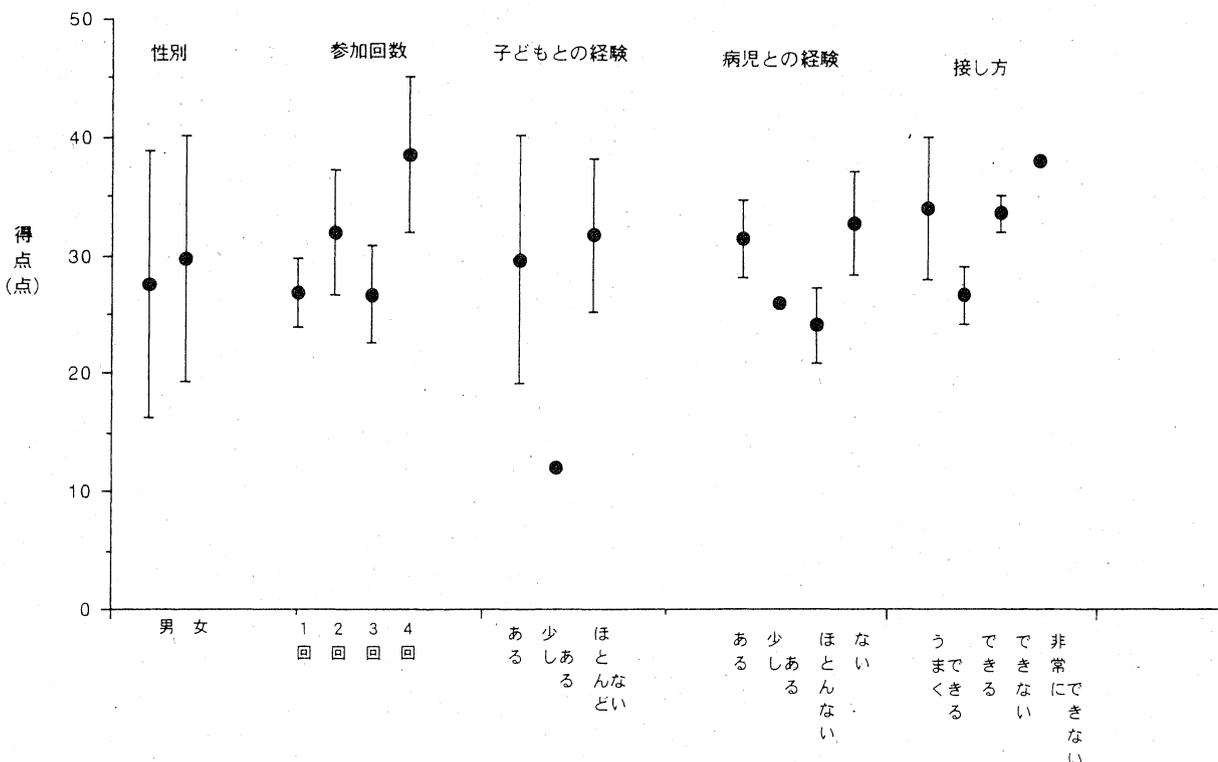


図1 接近得点の比較

● Mean ± S.E N=25

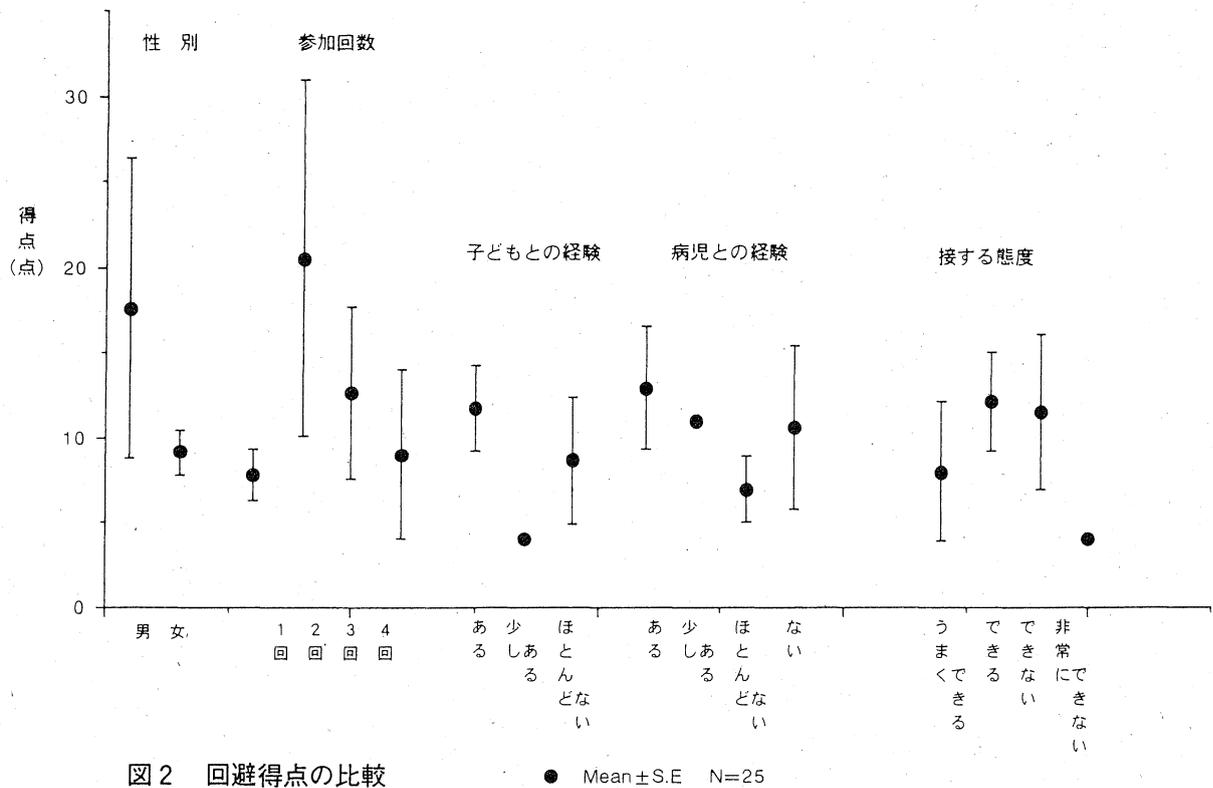


図2 回避得点の比較

● Mean ± S.E. N=25

もは辛い」「わがまま」「難しい」で1.4点以上であった。

3) 対児感情への影響要因

参加回数では、接近得点は4回参加が38.5点が一番高く、回避得点では2回参加が20.5点が一番高かった。

子どもと接した経験の有無では、接近得点では「子どもとの経験がほとんどない」が31.7点が一番高く、次いで「ある」の29.7点、回避得点では「経験がある」が11.7点が高かった。

病児との経験別では、接近得点では「経験がない」が32.7点が一番高く、回避得点では「ある」が12.9点が一番高かった。

子どもとの接し方では、接近得点では「非常にできない」が38.0点が一番高く、次いで「うまくできる」34.0点、回避得点では「できる」12.1点、「できない」11.5点が高く、「非常にできない」で4.0点と一番低かった。

これらの間に有意差はみられなかった。

2. ボランティア活動後の子ども理解 (表6、7)

1) ボランティアでの活動内容

ボランティアでの活動内容は、主に二つの仕事に分類された。

①受け持ちの子どもに対する生活の援助

小学生あるいは中学生を一人受け持ち、その子に対する生活の援助を行う。生活の援助は、受け持ちの子の年齢や病状に応じて、生活全般の世話であったり、遊ぶことであったり、または食事や注射の確認や、低血糖症状の観察を行ったりと多様であった。

②サマーキャンプの運営

キャンプ全体の運営に関わる会計係や企画・運営の係、またキャンプ当日の催し物の係(司会進行や登山、道具係)などであった。

2) 子どもおよび病児との関係形成と理解

子どもとの関係形成や理解はインタビュー内容から以下のように分類された。

①病児に対する理解

病児に対しては、「子どもであっても自分の病気をよく理解していた」「将来に不安を持っていた」と述べているように、子どもが自分の糖尿病に対して自分なりの理解をしていること、病気を持つことによる不安を感じていることを学んでいた。また、「普通の子どもと変わらない」「病気のことを意識しなくなった」という感想を持った学生が多く、病児であっても普通の子どもと変わらない存在であると

表6 大山家族ボランティアの日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
8/1 (日)	ドキドキ・ワクワクの1週間スタート!!					開会式	昼食	移動	オリエンテーション	おやつ	入浴							
検査の日 2 (月)	盆ダンス	検査注射	朝食	朝食	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射
山の日 3 (火)	検査注射	朝食	移動	トイレ	朝食	登山	登山	登山	登山	移動	入浴							
イベントの日 4 (水)		盆ダンス	検査注射	朝食	朝食	球技大会	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射
海の日 5 (木)		盆ダンス	検査注射	朝食	朝食	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射
海の日 6 (金)		盆ダンス	検査注射	朝食	朝食	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射
お楽しみ会の日 7 (土)		盆ダンス	検査注射	朝食	朝食	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射
8 (日)		盆ダンス	検査注射	朝食	朝食	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射	検査注射

とらえていた。

②子どもの能力に対する理解

「キャンプの最初は泣いて食事も取れなかった子が、最後には全部食べられるようになった。子どもの成長をみることでうれしかった「小学生でありながら、糖尿病を理解し食事や注射などの自己管理を行っており、しっかりしていると驚いた」「小2の子に小3の子が、自己注射ができるように励ましているのを見た。そして小2の子が自己注射できたのを見て、子どもの力に驚いた」というように子どもの持っている能力や可能性について学んでいた。

③子どもとの関係形成に関する学び

「子どもの個性を知った、奥深さを知った」「子どもの視線でものをみることができるようになった」「子どもに対する構えが変わった。少し考えて関わられるようになった」というように子どもの特性や自分の行動の変容を感想に話す学生がいた。

考 察

1. 経験の有無と接し方との関係

子どもと接した経験については、全体の8割以上の22名が「ある、少しある」と答えており、非常に高い値となっていた。しかし、接した内容は、ほとんどが幼いときの兄弟や姉妹との関わりであったり、親戚の子と遊んだりした経験であり、青年期に入ってからの子どもの関わりではなかった。一方、病児と接した体験になると60%に減少するが、子どもと接した経験と比較すれば低値となっているものの、過去の大山家族参加経験者が含まれているため、予測より高い値になっていると考えられる。

子どもと接した経験の有無と接する態度との関係を見ると、接した経験のある学生22名中21名が「うまく接することができる」と答え、病児と接した経験があると答えた15名全員が「うまく接することができる」と答えていた。有意差検定においても、接した経験と

表7 大山家族ボランティアにおける活動内容と子ども理解の変化

	参加 学年	参加 回数	活動内容	子どもとの関係	子ども理解
1	1年 女子	1	受け持ち(中3女子)と遊ぶ	自分のイメージと全く違って戸惑ったが、次第に慣れた。	自分の病気をよく知っていた、かわいそうな目で見ないでほしいと言われた。
2	1年 女子	1	受け持ち(中2女子)を遠くから見守る感じ	自分大人しい性格なので、自分から声を掛けないといけなかったので辛かった。	病気についてははなさないが、不安に思っていた。
3	1年 男子	1	受け持ち(小2男児)がホームシックになったので、つきっきりで生活の世話をした	いろいろな子どもがいて、対応が大変だった。	子どもの成長を見ることができた(最初は食事が食べられなかったが、最後には全部食べられるようになるなど)
4	1年 女子	1	受け持ち(小1男児)の世話(食事、遊び、入浴から就寝も近くで、ずっと付きっきりで)	食事の度に母親を思い出し、泣いて大変だった。しかし、別れる際、「迷惑をかけてごめんなさい」と言ってくれ、わかってくれたと感じた。	言わなくてはならないことは、きちんと言わなくてはならないとわかった。(登山の時朝食を食べなかった。「食べない子は連れて行かない。私は行きたいから行く」と言うと大急ぎで食べた)
5	1年 女子	1	受け持ち(初参加の小5女子)、登山とバス係	楽しんでいる子どもの笑顔を見て、楽しかった。心を閉ざしている子は難しい。	しっかりしている子がいて驚いた。やはり、子どもはいいな。
6	1年 女子	1	受け持ち(小4女子)、登山係	楽しかった。	暗いイメージから普通の子と変わらないと感じた。子どもは子どもなりに考えていることがわかった。
7	1年 女子	1	受け持ち(中3女子(初回))、運営とイベント係	楽しかったが、悪いことをしている子を強く叱れなかった。	子どもの気持ちの理解は難しい。憎らしいところもあり、かわいいだけではない
8	1年 女子	1	受け持ち(中3女子)、登山の係り	楽しかった。子どもなりにの考え方に接して新鮮だった。	病児も普通の子と変わらない。病気のレッテルをはるのは間違っている。
9	1年 女子	1	会計係、道具係、子どもと遊んだ	叱った後のフォローが難しい。気持ちを読みとるのが難しかった。	病気のことを意識しなくなった。
10	1年 女子	1	受け持ち(中3女子)、道具係り	あまり心を開いてくれなかったが、他のメンバーの強力でうまくいった。現在も文通している。	しっかりしていると思った。
11	1年 女子	1		子どものわがままへの対応に悩む。子どもにも振り回されていた。最後にはお互いに分かり合えた。	子どもはかわいいという気持ちに変化はない。子どもに対する構えが変わった。少し考えて関わられるようになった。
12	2年 女子	2	受け持ち(中2)の生活の世話、ヘルパー係	大変だった、受け持ち以外の子とは仲良くできた。子どもは正直なので、一度嫌われると大変である。	イメージは大きく変化した。子どもの個性を知る。子どもの奥深さを知った。気の合わない子どもとの関わりなど看護婦には良い学びであった。
13	3年 女子	2	受け持ち(中3女子)、運営係	担当の子とは心を開いて話せて楽しかったが、男の子との関係は難しかった。	疾患を持った子であっても普通の子と変わらない。病気によって人生が制限されるものではない。
14	2年 女子	2	まとめ役、1年生の相談役	学校で病気のことを隠している子も多い。どうやって現実の厳しさを乗り越える力をつけるかが難しい。十分なカウンセリングができなかったと思うことがある。	苦手意識はなくなった。
15	2年 女子	2	受け持ち(中3女子)の食事、注射、補食の確認	昨年は小4の子で、うまく関係が築けなかった。今年は慣れて積極的になれた。	子ども理解に変化ない。子どもはかわいくて、おもしろいと思う。
16	3年 女子	3	企画、運営係	子どもと一緒に遊んでいる。	①病気を持つ子の見方に変化がある。子どもらしいところを持つ反面、将来への心構えなどを話す。 ②小2の子が自己注射を「やれない、やらない」とだだをこねていると1歳上の子が「やれるよ、ほくもやっている」とやってみせて、できるようになった。子どもの力に驚いた。
17	3年 女子	3	催し物の司会進行	毎回、うまく接することができず、泣いてしまうことがある。緊張する。	子どもの視線で物を見ることができるようになった。隣れみ持たないで接することが大事と思う。
18	3年 女子	3	受け持ちの子に1対1で関わる。全体の世話係。	接することができて楽しい。カウンセラーの役割が難しかった。	病気を持つ子どもの生活の場での悩みを知る、様々な子どもの考えを知る、子どもをさらに深く理解できた。

接する態度、また病児との経験と接する態度との間には有意な関連がみられ、子どもとうまく接するための経験の重要性が明らかになった。

2. 子どもと接した経験の有無と対児感情との関係

愛着すなわち児を肯定し受容する方向の感情を接近感情、嫌悪的すなわち児を否定し拒否する方向の感情を回避感情と呼んでいる。今回の調査では接近得点の平均値は29.2点であった。

花沢²⁾が調査した20～24歳までの女性における接近得点は未婚で24.6点、20代の母親で26.2点であるので、この値と比較してみても高い値であり、子どもに対して肯定的な感情を強く持っていることがわかる。これは医療系大学に進学する学生は人間に興味を持ち、やさしい思いやりをもった人物が多いことから、子どもに対しても肯定的な感情を持っているのではないかと考える。

しかし、一方では、回避得点の平均は11.0点であり、先の花沢²⁾の調査において、回避得点は、20～24歳で9.0点、20代の母親で6.2点であるので、否定的な感情も強く持っている傾向がみられた。青年層においては、子どもに対する肯定的な感情と否定的な感情が拮抗している状態にあることが考えられる。

接近得点と回避得点の関係を詳しくみていくと、4回参加者では接近得点は高く、回避得点も低くなっている。インタビュー内容をみると、参加回数が増すごとに、学生自身の視線ではなく、子どもの視線でものを考えることができる態度を習得していることに気がつく。つまり、子どもの立場で物事を考えることができるようになるのである。このことが、接近得点を高くし、回避得点を低くしているのではないかと考える。

これは接する態度との関係にも共通していえることである。すなわち、「子どもとうまく接することができる」学生においては、接近得点が高く、回避得点は低い。逆に「うまく接することができない」学生は接近得点も高いが、回避得点も高く、先の結果と一致している。花沢³⁾は「ある対象への正の感情と負の感情との相克は、その個人の動機づけを阻害し、行動を猶予させることになる」といっており、その結果「子どもとうまく接することができない」という状況になることを証明しているものと考えられる。

以上のことから、子どもと接する経験は、対児感情に影響を及ぼし、子どもとうまく接することができる

ような態度を習得させる要因として挙げることができる。

3. 子ども理解と体験との関係

大山家族参加後の子ども理解の内容をみると、「自分の病気をよく知っていた」「病児であっても普通のこと変わらない」「しっかりしている」といった子どもの印象といえるものから、参加回数を重ねたり、参加中の子どもとの関わりの内容によっては、「子どもに対する構えが変わった」「こどもの奥深さを知った」「子どもの視線でものをみることができるようになった」などの自分の行動の変容に至るものまで聞かれている。

大山家族ボランティアの日程をみると8日間子どもと寝食をともにするというものである。つまり一緒に生活するということである。これが非常に重要である。なぜなら、生活の中では自分を取り繕い続けることが困難だからである。ましてや、自分の感情に正直である子どもにとって「いい子」を続けることは困難である。したがって、子どもの人間性が表現されるため、学生は一人の子ども全体と接することになり、子どもという人間を理解することができることになる。

参加者のインタビュー内容をみると、大山家族参加中にあった子どもとの人間関係と子どもの理解については別のものであることがわかる。子どもとの関係があまりよくなかったのではないかと想像されるものに、「子どもの気持ちの理解は難しい」「憎らしいところもあり、かわいいだけではない」という感想があった。しかし、これは子どもの実態に触れて、「子どもとは理解しがたい存在」あるいは「かわいいだけではすまない存在」であると、子どもと対面して初めて得ることができる理解を示している表現と思われる。しかし、これは子どもに対する初期的な理解と考える。この理解を「子どもの視点で考えることができる」という段階まで進めるためには、子どもと接する機会を増やしたり、関係形成がうまくいくようにモデルを示したり、仲介役を行うなどの適切な援助が必要である。

「子どもを肯定する気持ち」が形成されるには「幼い子どもと遊んだ経験」が影響し、また「女性性を肯定する気持ち」には「子どもの世話」のような育児と同様の経験が重要である⁴⁾ことから、子ども理解を深めるためには、子どもと楽しく過ごす体験や、生活の世話をする体験が必要である。その点から大山家族ボ

ランティアのような体験は非常に有効であると考え
る。

要 約

糖尿病の子どもの大山家族ボランティアに参加する
学生25名を対象に子どもと接した有無と、病児に対す
る対児感情のアンケート調査を行った。また、参加後、
本医療技術短期大学部に在籍する参加学生18名に対
してボランティアでの活動内容について面接聞き取り調
査を行った。

1. 子どもと接した経験は、25名中22名が「ある」と
答え、病児と接した経験に対しては13名が「ある」
と答えた。
2. 子どもと接する態度については、25名中22名が
「うまく接することができる」と答え、このうち21
名が「接した経験がある」と答えた。
3. 子どもと接した経験と接する態度、病児と接した
経験と接する態度との間には χ^2 検定にて有意差が
みられた。
4. 対児感情においては、接近得点の平均値は29.2点、
回避得点の平均値は11.0点であった。

5. ボランティア参加中の子どもとの関係の良否とは
関係なく、参加後の子ども理解は深まっていた。

本研究の趣旨に賛同しアンケート調査にご協力頂き
ました25名の大山家族ボランティア参加学生の皆様、
またインタビューにご協力頂きました18名の医療技術
短期大学部学生の皆様に深く感謝致します。

この研究は平成11年度教育改革・改善プロジェクト
の助成による研究の一部である。

文 献

- 1) 清水凡生：育児と母性、父性，チャイルドヘルス，
2 (1)，22，1999
- 2) 花沢成一：母性心理学，pp89，医学書院，1999
- 3) 花沢成一：母性心理学，pp65，医学書院，1999
- 4) 三瓶まり：母性意識の程度とその形成要因
～V A S 調査用紙に基づいて～，鳥取大学医学部
医療技術短期大学部紀要，30，39-43，1999

Summary

A questionnaire about child development was first asked to twenty-five students belonging to the Faculty of Medicine, Tottori University. After answering the questionnaire, the student went to do volunteer work at "Daisen-family" where children having diabetes are living. The students felt their daily life improved after the volunteer work. A questionnaire was asked again to the eighteen students. Then the first and second questionnaire were compared to find out images and impressions of the children. Results were statistically analyzed and offer important information in considering the effectiveness of experiences as child-helpers. The results are summarized as follows:

1. Do you have any experience helping or playing with children? Yes: 22 students helping or playing with children with a serious disease? Yes: 13 students
2. Do you have a confidence in being good at playing with children? Yes: 22 children
Twenty-one students who said yes to the above question also have some experience in playing with children.
3. The average positive score for understanding child development was 29.17 points.
The average negative score for understanding child development was 11.00 points
4. The students who had some experience playing with children got a high positive score and a low negative score.
5. The students who attended the volunteer work at "Daisen-Family" and even failed at being good at helping children, at least succeeded in some understanding of child development.